

楠本正継博士の朱子学研究

柴田, 篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 中国哲学史

<https://doi.org/10.15017/16923>

出版情報 : 哲學年報. 69, pp.177-203, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

楠本正継博士の朱子学研究

柴 田 篤

はじめに

本稿で取り上げる楠本正継^{まほつぐ}博士（一八九六～一九六三）は、一九二六年から三十数年間にわたって、九州大学法文学部（のち文学部）中国哲学史講座の初代教授を務め、中国近世儒学思想の研究と教育に偉大な足跡を遺した人物である。特に生涯をかけた研究をまとめて刊行した著書『宋明時代儒学思想の研究』（廣池学園出版部、一九六二）は、日本近代における宋明儒学思想研究の金字塔として、今日も揺るぎない評価を受けている。

論者は、楠本正継博士の宋明儒学思想研究の姿勢・方法などについて、既に概括的な報告を行ってきた。また、その家学との関係や九州大学における蔵書の構築に果たした役割などについても、若干の考察を発表してきた。^①本稿は特に博士の朱子学研究の足跡を辿りながら、その特質と意義について考察するものである。

一 生涯と著述

先ず、楠本正継博士の生涯について概観していくことにする。^②楠本博士は、明治二十九年（一八九六）一二月二九日、長崎県東彼杵郡崎針尾村（現佐世保市）に父正翼の長男として生まれ、長崎県立平戸中学猶興館（現長崎県立猶興館高等学校）、第五高等学校（現熊本大学教養部）を経て、大正八年（一九一九）に東京帝国大学（現東京大学）文学部に入学する。そして、同一一年（一九二二）に支那哲学科を卒業し、翌一二年四月に浦和高等学校（現埼玉大学）の教授となる。さらに、同一五年一〇月、九州帝国大学（現九州大学）法文学部助教教授として九州の地に戻り、翌昭和二年五月に九州帝国大学法文学部支那哲学史講座教授に就任する。翌年から二年間、「哲学及び支那哲学史研究」のため、ドイツを中心として、イギリス・中国に留学をする。帰国後、本格的な宋明儒学研究を開始し、昭和一七年（一九四二）六月には、論文「陸王学派思想の発展」によって、東京大学より文学博士の学位を授与される。以後、陽明学・朱子学を中心とした研究論文を次々に発表する。

戦後は日本における中国学研究の重鎮として活躍し、日本中国学会の理事や九州中国学会の会長などを歴任する。研究活動としては、昭和三〇年（一九五五）より文部省科学研究費の助成を受け、総合研究「九州儒学思想の研究」の代表者として、九州地域の近世儒学に関する共同研究を推進する。^③さらに、同三一年（一九五六）からは、アメリカのロックフェラー財団研究助成費による「宋明思想の研究」を開始し、宋明思想に関する共同研究を組織し展開していく。^④

この間、学内にあつては中国思想、江戸儒学をはじめとした中国学関連書籍の蒐集に尽力し、戦争末期には附属図書館長として、貴重な書籍の疎開に奔走し、膨大な書籍を戦禍から守り抜いた。^⑤このような多くの功績を残

し、昭和三五年（一九六〇）三月に九州大学を定年退官し、六月には九州大学名誉教授の称号を受ける。二年後の同三七年（一九六二）一月に、生涯の研究の総決算として、『宋明時代儒学思想の研究』を廣池学園出版部より刊行する。この業績により、翌三八年（一九六三）一月には西日本新聞社（福岡市）より「第二十二回西日本文化賞」を授与される。しかし、病既に篤く、翌月二月三日、福岡市の自宅において逝去する。享年六六歳であった。翌年一月には、朝日新聞社より「昭和三十八年度朝日賞」が授与される。

以上のように、楠本正継博士は生涯をかけて宋明儒学思想の研究を行ったわけであるが、実はそのことは自身の家系と深い関係があった。

楠本正継博士の父正翼（一八七三〜一九二二）は、号を海山という儒学者であった。海山の父は楠本端山（名は後覚、一八二八〜一八八三）と言い、平戸藩の藩儒として、幕末の藩政改革にも関わる。維新後も要職にあつたが、明治六年（一八七三）に罷免され、後に故郷針尾に帰り、弟の碩水と共に、私塾「鳳鳴書院」を設立する。そして同一六年（一八八三）に享年五六歳で逝去する。

端山の弟は楠本碩水（名は孚嘉、一八三二〜一九一六）と言い、兄端山と同様、平戸藩の藩儒となり、肥後長洲の月田蒙斎から崎門の伝授を受ける。端山と共に、山崎闇斎―三宅尚斎―久米訂斎―宇井黙斎―千手廉斎―千手旭山―月田蒙斎と流れる学統（崎門）^⑥を継承した碩水は、三九歳の時に役職と家禄とを辞して針尾に隠棲し、以後、八一歳でこの世を去るまで、ひたすら崎門の朱子学を伝承するためにその身を尽くした。

一一歳で父を亡くした海山は、叔父碩水の庇護と薰陶を受け、その傍らにあつて、同じく崎門朱子学者としての生涯を送る。海山は碩水に協力して、山崎闇斎及びその学統の伝記資料を収めた『日本道学淵源録』の大幅な増補を行い、更に崎門の学統系図である『崎門学脈系譜』を刊行する。彼は生涯ほとんど出仕することなく、宋

明儒学や崎門写本の蒐集や書写を行い、叔父碩水の崎門顕彰事業を完成させる。大正一〇年（一九二一）、長子正継が東京大学を卒業する一年前に、針尾の自宅で享年四九歳で逝去する。^①

このように楠本正継博士が学者としての生涯を開始した時、既に父海山はこの世になかったのであるが、眼前には端山と碩水、そして父海山が生涯をかけて蒐集し、また書写した膨大な量の宋明学、崎門学関係の書籍が残されていたのである。^② これらの書物と崎門学の流れを汲む楠本家の家学、これが楠本正継博士の中国哲学研究の土台としてあったと言える。

楠本博士の著作（著書・論文）は、本稿末〔附録二〕の通りであるが、それらの論考を、取り上げているテーマによって便宜的に整理すると、おおよそ次の五つに分類される。

- ① 『周易』と老荘、孫子など中国古代思想に関するもの。
- ② 程朱学を中心とした宋代理学思想に関するもの。
- ③ 陸王学を中心とした宋明心学思想に関するもの。
- ④ 陽明学、崎門学、熊本実学思想を中心とした日本儒学に関するもの。
- ⑤ 中国思想、宋明儒学を貫く問題を扱ったもの。

このうち、②と③が楠本博士の研究の中心をなしており、生前唯一の著書である『宋明時代儒学思想の研究』は、正に生涯をかけた研究の成果が込められたものと言える。次に、『宋明時代儒学思想の研究』を中心にして、その朱子学研究の概要とその特色について検討していくことにする。

二 朱子学研究

『宋明時代儒学思想の研究』は、「第一編 宋学の部」と「第二編 明学の部」から成っている。⁽⁹⁾このうち、朱子（朱熹、一一三〇～一二〇〇）の思想に関しては、第一編の「第四章 宋学後期」の「第五節 朱晦菴」の項（二七八～二七七頁）に詳細に論じられている。同項は、「一 世界観」、「二 人生観」、「三 功夫」、「四 教育」、「五 社倉法の成立と礼制の研究」の五節によって構成されている。一方、楠本博士が発表した論文の内、朱子の思想を取り上げた専論としては、次のものが挙げられる（公刊順）。

- ① 「朱子の政事と其思想」（九州帝国大学新聞）第二五三号、一九四二
- ② 「朱子学の精神」（日本諸学研究報告）第一八編、文部省教学局、昭和一八年、一九四三
- ③ 「朱子学の精神」（②の改訂、「哲学年報」第四輯、九州帝国大学哲学研究会、昭和一九年、一九四四）
- ④ 「朱晦庵の二遺業」（「哲学年報」第一四輯、九州大学哲学研究会、昭和二八年、一九五三）

このうち②③「朱子学の精神」は増補修訂されて、『宋明時代儒学思想の研究』の「一 世界観」、「二 人生観」、「三 功夫」、「四 教育」の部分に収められる。また、④「朱晦庵の二遺業」は、『宋明時代儒学思想の研究』の「五 社倉法の成立と礼制の研究」にほぼそのままの形で収められる。全体をイとロの部分に分け、社倉法並びに『儀礼経伝通解』に関してそれぞれ論じている。一方、①「朱子の政事と其思想」は、九州帝国大学新聞に寄稿した小文ではあるが、「朱晦庵の二遺業」の中でこの文を指して、「同胞愛の精神が社倉法等政治施設の学術的性格と緊密に相俟って成果をあげた事を論じた点では、其趣旨全く本稿と同じである」と注記されているように、④の前半部分と関係深いと言える。⁽¹⁰⁾つまり、「朱子学の精神」と「朱晦庵の二遺業」の二論文が、最終的に『宋明時

代儒学思想の研究』の「第五節 朱晦菴」の項にまとめられていたことが分かる。次に、その内容について節毎に具体的に考察することにする。

(1) 世界観

先ず、「二 世界観」では、「朱子学は世界を理及び気の二方面から考へてゐる」という文章から始まるように、朱子の世界観（存在論）の中心をなす理気論を取り上げ、次のように論じている。

理のうち「所以然」と名付けられるものは事物の根本因を言い、所謂太極である。朱子学においては、この「太極」は「至極」であると同時に「最も包擁的」で、すべての物を内に持たなければならなかつた。だから、「朱子学に於ては飽くまで太極が直ちに無極でなければ意義が無かつた」と捉えられ、「無極にして太極」という考へは、「至極の理が更に其の上の絶対者より出づることではなく、そのまま偏倚性を放棄することを求める心である」と説明される。¹⁾

続いて、「所以然の理」は、その働きから言えば、「自らなる性質を有する」と説明される。つまり、所以然の理は世界を生成するが、あくまでも「自然」に行われる、とされる。ただ、その自然なる働きは、世界を生成するという大いなる目的を完成するものであるから、所以然は「天地の心」と表現される、と指摘する。更に、天地が物を生ずることを心とするという思想は、「重要な儒学の正旨」であると捉え、人心について言えば仁であるということから、朱子の仁の思想が説明される。

朱子においては、仁は「家及び国を本とした愛である」とされる。結論として、「朱子学に於ては世界を生ずるもの、その根本存在たる絶対者が家及び国を本とする人の徳、ひいては道徳法則と関連して来るのである。否、

寧ろ家・国の道德法則が世界を生ずるもの、その眞の存在として絶対の權威を有するに至る」と述べられる。

この節の最後では理と氣の關係に言及する。先ず、「氣とは理が世界を生成する主宰的根本因であるのに対し、その材料となるものを意味する」と説明する。そして、朱子によれば、「所以然としての理は世界の根本因であり、非時間的に（この点、複雑な問題もあるが）氣即ち陰陽に先ち、氣を生じ、氣によりて存在する」とされる。理は陰陽に即いて其の本体を指すが、理と氣は決して混融してはならないとされる。朱子が明代の諸儒や江戸時代の古学派などと異なり、理氣を混融する傾向を取らないことについて、「それは何に因るかといへば、一には理の至高にして偏党無き所以、この意味に於ける其の絶対性を維持すること、二には此世の差別相を看過しないこと、以上が動機となつてゐる」と、説明している。更に、「朱子は一者の存在を説くが、同時に決して多者の相を軽視しない人であつた」と述べ、この点において、陸象山、王陽明、あるいは程明道・楊慈湖等とは著しく異なっている、と指摘している。

以上の「一 世界觀」の論述について、その特色をまとめてみることにする。

第一に、楠本博士は朱子の世界觀を説明するに当たつて、『朱子文集』、『朱子語類』等を次々に引用または注記しながら、朱子の考え方を辿るようにして、説明を行っている。所謂「思想を思想家自身に語らせる」という手法である。これは、この部分に限らず、本書すべての部分について言えることである。

第二に、朱子思想の中心概念とも言うべき「理」について、先ず「所以然の理」に注目し、「根本因」、「包擁的」、「偏倚性の放棄」、「自然なる働き」、「生成の目的」といった性格をその特色として捉えている。¹²⁾

第三に、「所以然」が「天地の生成の心」であることから、朱子の「仁」の思想に論及し、朱子学における「根本存在」（「理」）と「道德法則」（「仁」）の關係を明らかにしている。「世界觀」（存在論）と「人生觀」（倫理説）

の密接な関係性が解き明かされていると言える。

第四に、「理」と「氣」の關係を取り上げ、朱子が理氣を混融する傾向を取らなかつたことを説明するに当たつて、その「動機」に言及している。つまり、「理の絶対性を維持すること」、「この世の差別相を看過しないこと」がそのような考え方の原因としてあつた、と述べている。その学説（思想）を生み出し、それを支えている根源的な考え方（動機）を明らかにしようとする姿勢（視座）がここにあることが分かる。

第五に、朱子の理氣の捉え方を陸象山、王陽明、程明道、楊慈湖といった同時代、あるいは他の時代の思想家の考え方と比較している点である。個人の思想を思想史全体の中で比較検討していく視点がここに見られる。

（2） 人生觀

「二 人生觀」では、当然「心」や「性」の問題（心性論）が取り上げられるが、「世界觀に於ける理氣分離の考は人間を説くに当たつても亦朱子学の特色をなす」という言葉で始まるように、楠本博士は世界觀（存在論）との連関で人生觀（人間觀）を捉えている。これは先に指摘したように、「一 世界觀」の中でも言及されていた。そして、朱子学の人間觀を以下のように論じている。

朱子は、「身の主宰」を「心」とし、「心の本体」を「性」、「心の用（作用）」を「情」とし、「心は性情を統べる」と考える。「世界觀」で見た世界を生成する「所以然の理」は、万物の心に在つてはその「性」となる。これが「性即理」の見解である。理が「無極にして太極」であるように、「心の本体としての性も渾然たる全体——者がそのまま粲然として条理あるもの——多者なるが故に、空虚の見解をなすことは許されないとされる。「一者としての性」は「仁」であり、「多者としての性」は「仁・義・礼・智・信」であり、世界觀における「二元」と「元・

亨・利・貞」との関係に当たる。朱子は性を「実」（虚空ではない）なるものと捉えることにおいて、仏教との違いを明確にしている。

性は発して情となるが、情は必ずしも善ではないものも含むので、性と情との混合は防がれる。朱子は「愛の理、心の徳」と定義するが、それは、「愛を離絶しては仁の見処（現れ方―論者）が真实性を欠ぐ」が、同時に「愛そのものでは、また直ちに仁と言い難い」ことを意味している。

「所以然の理は氣を生じ、氣により人の性となる」が、理の他の一面である所当然は「此の性に本づく自然法則及び別して人の道であった」とされる。ここで、楠本博士はわざわざ「自然法則の部分を見落せば朱子学の解釈が狭きに失するやうに思ふ。殊に後述社倉法其他、朱子政事施設の実績の説明が半ば困難になる」と記している。ただし、「右の自然法則も実は宇宙の生命・目的に帰してゆく点に於て、結局機械的な自然法則ではなかつた」と説明している。以上のように、朱子学においては「所以然」と「所当然」が相待って始めて理の意味が尽きるとされる。

性自体は内在する所以然であり、「本然の性」と称され、本然の性が氣に内在する範囲において制限を受けることを「氣質の性」と言う。氣は一なる理が生じるものであるが、多様なものであるから、「本然の性」は「氣質の性」としては「差別」を生じることになる。「氣質の性により個性の相違が現はれ、常人の心に分裂の状態が存する」ことになる。ここに朱子の人心・道心論が存在する。楠本博士はここで「朱子はよく現実の人間性の複雑さを知つてゐた」と記し、現実の人間性が決して単純素朴なものではなく、朱子が堅苦の功夫を必要とするとしたのは、人間に対する真摯な観察をしていたからである、と述べている。本性の存在を、宇宙の根本実在として捉えると同時に、現実性をもって捉えるという朱子の根本姿勢がここでは強調されている。この節の結論は、

「朱子の思想は一貫して家と国とを基とする人倫の上に立つてゐた」というところにある。

以上の「二 人生観」の論述について、その特色をまとめてみることにする。

第一に、人生観（人間観）が世界観（存在論）との連関で捉えられ、心や性が理・氣の關係から明確に説明されている。

第二に、心性論においても、「一者（全体）」と「多者（条理）」によつて捉えるという視点（二者がそのまま多者）が保持されている。

第三に、朱子の思想に、宇宙の根本から捉える姿勢と同時に、現実性をもつて捉える姿勢がある点を特に強調している。

第四に、朱子の思想の根底には「人間に対する真摯な観察」があり、朱子が「よく現実の人間性の複雑さを知っていた」ことがその思想を生み出していると捉えられている。

（3） 功夫論

「三 功夫」は、「人は如何にして其の性の固有する所、職分の当に為すべき所を知つてその力を尽すことが出来るか。この問題に答へ得るものは学の外には無い」という文章から始まり、「学問に対する朱子の異常なる熱意はその一生を貫いて変らなかつた」と述べている。この節では、朱子は学問を二方面から説いたとして、窮理（格物）と涵養（居敬）に分けて説明を行っている。

『大学』に基づく「格物」という語の意味を朱子は物に即いて理を窮明することであるとするが、楠本博士は、朱子が生きた際に「反復体験」して、「深く事理に透徹すること」を要求し、「討議・研究の精神と是非に対する理

確なる認識とを尊重した」と指摘している。窮理は物に即いて行われるが、事物のうち人倫が最もよく表現されているものは礼であり、朱子が晩年に行つた『儀礼経伝通解』の編輯も、「格物による窮理の大規模なる試みであつた」と述べている。朱子の考える格物の功夫は、「内在の理の自覚」であつて、仏教のように「心の知覚」を識察することではなかつた。

学問のもう一つの面は、「涵養の功夫」であり、それは「人性として内在せる理の愛護のため」であると述べている。朱子の涵養の工夫は、程門の楊龜山から李延平に到る（更に遡れば周濂溪より発す）主静の思想の流れを汲むものとされる。そして楠本博士は、「動的事象の奥に静なるものを考へることは、宋代文化の精神、一歩を進めて言はば漢民族の根本性格に触れる点がある」と指摘される。その民族の根本性格は「自然」であり、それは「静」と言える。その「自然」、「静」も「大いなる生命」であり、その意味で「動」と言える。そして、「ここに中国精神文化最奥の問題があり、朱子学の精神も特に此圈内に包まれる」と述べている。更に、朱子の静の功夫の意義について、「心の本体であり、宇宙の根本存在であるその理に沈潜してゆく所にあつた」としている。

朱子が「敬」を唱えたのは静に偏することを避けたためであり、朱子の説く「敬」は「心の全体性を尊重する所の功夫である」としている。「本体としての性、並びに作用としての情、何れにも偏せざる功夫であり、本体として厳存し、作用として発露するものについて肅み慎む」ことであるとしている。朱子が敬の説明に当たつて、特に程伊川の「整齐嚴肅」を最も重視したのは、性と情を包括し主宰する心の生命は功夫を超えた功夫によつて育成しなければならぬと考えたからである。

以上のように、朱子の学問は居敬と窮理によつて完成するが、両者は互いに相発し、存養（居敬）の中にそのまま窮理の功夫が、窮理の中にそのまま存養（居敬）の功夫があるという言葉で、この節は結ばれている。

以上の「三 功夫」の論述について、その捉え方の特色をまとめてみることにする。

第一に、朱子の功夫論について、学問に対する「異常なる熱意」が根底にあつたとしている。

第二に、朱子学の二本の柱である窮理と居敬を、「人性として内在する理」の「自覚」と「愛護」と捉えている。

第三に、朱子の静の功夫を中国文化の根本精神（「自然」の思想）に関わるものとして捉えている。

第四に、「敬」を性と情、体と用を包括する、心の全体性を尊重する功夫として捉えている。

第五に、居敬と窮理を相発しあうものとして捉えている。

（4） 教育論

「四 教育」では、学問論との関係から大学と小学に対する朱子の見方を取り上げ、「居敬と窮理といふ学問の二端は古の小・大学の教育方針を襲ひ、その精神を復活せしめんとして案出され、特に居敬は当時の小学教育の欠陥を補ふものとされた」と述べている。朱子は鍛錬を主とする小学教育の上に、知識を主とする大学教育を位置付けたが、格物・致知から進む大学篇の根本思想の解釈によつて、朱子の大学教育の精神を知ることができると同時に、朱子が編輯に関わつた小学の書によつて、朱子の小学教育の精神を知ることができる。また、大学・小学の書物以外に朱子学の精神を見るために重要なものとして、『近思録』と「白鹿洞書院揭示」をあげる。殊に後者は、よく朱子教学の精神を示したものとされている。¹³⁾

（5） 社會法の設立

「五 社會法の設立と礼制の研究」では、先ず総論として朱子の「全体大用の思想」が説明される。朱子によ

れば、格物・窮理によって、全き人心の本体（全体）と大いなるその作用（大用）が顕現する。全体とは仁の理に代表される「偏せぬ立場」、大用とは愛の情に代表される「広い立場」である。朱子は「無」や「絶対」を説く思想（仏教や老荘）が空虚に留まり社会生活性を失うという弊害に対して「大用」の立場でこれを救い、一方、社会生活の場を重要視する人々（功利の徒）が権謀術数や流俗卑近に溺れるという弊害に対して「全体」の立場でこれを救おうとした。これが「全体大用の思想」である。

この朱子の「全体大用の思想」が実際の政治経済の面に現れたのが社倉法の設立であり、学術面の成果となつて現れたのが『儀礼経伝通解』に由来する礼制の研究であつた、と指摘する。このように朱子の思想と行動は一体のものであり、朱子の「全体大用の思想」は、宋末から元、明を経て清代まで大きな進展を遂げた、とされる。この節の前半（イ）では、乾道四年（一一六八）の崇安県の社倉設置から始まる朱子の社倉法の具体的な内容が説明され、その理念と特色について論じている。

最初に、「朱子社倉法などの荒政は人間の最も捉はれない広い立場、全体的、無的立場としての仁の理に本づき、同朋愛の実現を目標とし、事理に即した施設がその大用（大きな作用）として樹立される所に成り立つ」と述べている。社倉法の設立は「全体大用の思想」の実現に他ならない、とするのである。そして、同朋愛の精神が生かされるためには、「現実存在に適した綿密で具体的な施設が営まなければならない」とあるとする。「云はば愛の心なり（心のまま―論者）が業（事業―論者）に現はされて施設化するというのが根本の考へである」と言う。

楠本博士は、朱子社倉法の内容を見るために朱子の上奏文を引用した上で、関心を引くのは、「事目を通して見られる朱子その人の考方」、「此人の思想傾向」である、と述べ、朱子社倉法の根本理念を分析していく。社倉

法という具体的実政は、同胞愛という全体的無的な立場が大きな作用として顕現し、両者が相即したものである。朱子の社会事目奏上という行動には、彼自身の同胞愛の態度と、的確な知識に基づく強い信念があった、と指摘し、「その態度は確乎不拔であつた。我々に興味があるのは此事に外ならない」と述べている。

楠本博士は、朱子の社会法を歴史的な側面からも跡付け、「朱子社会法は当時の実情に沿ひ、古来の制度を改造実施した所に其特色があつた」と指摘している。朱子が社会法を実施するに当たつて行つた、人間生活の経緯における法則の調査こそ、朱子学の「窮理」に含まれるものであると、楠本博士は述べている。その際の「理」とは、主観的な「意見」などではなく、社会的、経済的生活を営む人間存在における自然的法則を指すものであり、朱子はその存在する複雑な事情、御しがたい傾向を洞察（窮理）しようとした、と述べている。こうした人間存在のあり方は、「氣」に関わるものであり、「この意味で朱子は決して氣を軽視しない思想家である」と述べている。そして朱子が、人間の現実性として「氣」（物質的、肉体的性質）の強さを主張し、堅苦の功夫を説いたのは、「安易に救ひ難い人間存在の性質を見たからである」と述べている。

以上の「社会法の設立」の論述について、その捉え方の特色をまとめてみることにする。

第一に、朱子の思想と行動が一体のものであると明確に捉えられている。

第二に、朱子の「全体大用の思想」を、歴史的影響力をも含めて、極めて重要なものとして高く評価している。

第三に、朱子の主張や行動の根底に、彼の根本的考え方や「態度」、「思想傾向」や「信念」といったものを読み取るうとしている。

第四に、朱子の功夫論の一つの柱である「窮理」が、単なる観念の世界のもの（主観）ではなく、彼自身の実践の中に存在したことを解明している。

第五に、社会法における思想と実践の一体化を見ることを通して、朱子の「理」及び「気」の捉え方が、通常言われているものと異なることを明らかにしている。

第六に、社会法の設立を、朱子の世界観、人生観、功夫論などがすべて包括された実践として捉えている。

(6) 礼制の研究

「五 社会法の設立と礼制の研究」の後半(口)では、礼制の研究、すなわち朱子の『儀礼経伝通解』(以下『通解』と略称)の編纂が取り上げられる。¹⁾

まず、礼制と言われるものは、元来「嘗て行はれた共同生活の制度慣習」であり、従って礼制の研究も、「人間相共に生きる心」すなわち「全体的無的な同胞愛の精神」から開拓されてくるものである、と指摘する。

朱子は、古経の中で儀礼が廃されたことに対して、逆に儀礼を経として位置付けており、楠本博士は、先ず『通解』は「儀礼を中心として行はれた礼制の総合的組織的研究である」と位置付ける。朱子は、礼記を「秦漢上下諸儒が儀礼を解釈した書」と捉え、左伝、国語などの文と共に処理して『通解』に編入しているが、楠本博士は、ここに制度・慣習がその意義の解明を得て、「実学」が成立する、と述べている。そして、ここで、「実学」を「古来の資料の文献学的、実証的吟味を通じて、人間生活の真实性を究める学問」と説明している。

資料の実証的吟味が『通解』編纂の条件であるが、この際に朱子は、古経の欠略せる所を注疏を以て補う姿勢を見せ、その意味で漢儒の意義を認めており、このことが後に清朝漢学者(考証学者)が朱子礼制の学に興味を寄せ、その編纂事業を継承することに繋がる。

『通解』は儀礼を骨子とする礼制の大規模な編輯であるが、手続きとして徹底した「実証的態度」が取られた、

ということが指摘される。

楠本博士は、特に『通解』編纂の模様、すなわちこの書が最初から多くの資料を収集し、多くの専門学者の協力を得て行うべく計画されたことに注目し、そこにこの書物の性質があると共に、朱子学そのものの特質があると指摘している。

最後に楠本博士は、朱子学の功夫の柱である居敬と窮理と『通解』編纂の関係について言及している。礼によって人間生命が正しく育成されるから、居敬の手懸りを礼に求めると同時に、窮理の手懸りを礼に求めることも可能である。物を人間社会の方面で考えたのが礼であるから、『通解』を「朱子窮理の学(実学)を行った成果とする」ことができる、と述べている。

以上見てきた「礼制の研究」の中で、特に注目すべき表現を二箇所挙げることにする。

第一には、『通解』を説明するに当たって、「ここに叙述し度いのは此書の一々の内容そのものではなく、社会の場合と同様、内容を通じて看取される思想の傾向である」と述べている点である。

第二には、『通解』編纂に際し朱子は門人知友の協力を得るが、これについて清の夏忻が『述朱質疑』に協力者の人名を出していることに触れて、「ここに必要なのは人名を知ることよりも寧ろその人々の協力を指導した朱子の学術的態度を知ることである」と述べている点である。

注目したいのは、楠本博士が『通解』編纂という朱子の学術に対して、その学術の内容の底にある「思想の傾向」あるいは「学術的態度」に迫ろうとしているという点である。朱子の思想の根底にある「信念」、「態度」、「傾向」に注目しているのである。学術思想の解明が、もう一段奥まで進んで行くところに楠本博士の研究視点の特色を見ることができるのではないだろうか。

三 朱子学研究の視点

以上、『宋明時代儒学思想の研究』の朱子の項を中心に見てきたが、改めて楠本正継博士の朱子学研究の視点について整理してみることにする。

朱子思想の大きな特色である理気論に基く心性論について、『宋明時代儒学思想の研究』では「第二編 明学の部」、「第一章 宋代陸学」の中で、わざわざ第一節を「朱子学の特色」に割いて説明をしている。その中で、朱子学においては、何故に性即理であるが心即理ではないのか、という問いを自ら示し、「一言にして言へば、性は静的であるけれども、心は動的な方面をも有するからであるといふのがその答である」と述べている。そして、そのような考えの底には「一の動機が潜んでゐた」として、次のように述べている。「朱子は所謂静的な「体」の絶対性・客観性・純粹性を維持し、「用」の相対性・主観性・雑多性に対して、一には道德が何人にも課せられる根拠を求めてその厳粛な立場を説き、二には内面的な落付きある深い功夫を説かんと企てたものと思はれる」と。楠本博士は、朱子学のこの二元的傾向こそが、朱子学が「世界人生の体験に於ける真面目さと深刻さ」と同時に「理論における鋭利さ」を示すものであると述べ、「朱子学が持つ倫理哲学としての深い意義、宋代精神史上の重要な意義も主としてこの点に係る」と明言している。

既に見てきたように、楠本博士の朱子学研究は、膨大な原典資料の徹底した読み込みの上に、原典の記述を縦横に駆使して思想家自体に語らせながら、学説・思想の全体像とその特質を浮かび上がらせるものであったが、実はその研究の特質は更にその先にあったと言える。すなわち、朱子の学説・思想を支えているもの、基づくところは何かということを明らかにしようとする姿勢であった。その思想を成り立たしめている「動機」、「信念」、

「態度」、「傾向」に注目していることが、論述の端々から見て取ることが出来る。そして、その視点は一思想家個人の問題に向けられると同時に、個人を超えて時代の問題にまで向けられている。先の文章に見える「宋代精神史上の重要な意義」というような表現がそれである。「宋代精神の根底を造るに至つた形而上学の性質」、「時代の奥に動いてゐた全体的精神」とあるように、ここでは特に「精神」という言葉が、重要な意味を持つて使われているようである。

楠本博士は、先に挙げた「朱子学の精神」（一九四三、四四年）を著した後に、「陽明学の精神」（一九五一年）という論文を発表しているが、その「附記」に次のように記している。「本稿は王陽明の定説と思はれる主要な資料の吟味の上に立つて、陽明学の意図を明かにしようと試みたもので、筆者が先きに公にした朱子学の精神と題するものと姉妹の篇を成してゐる。姉妹の篇を成す所以は、朱王の精神はそれによつて代表される人間精神と二つの典型と考へられ、両々相待つて更に大きな人間精神、その全的構造が成り立つと思はれるから」と。つまり、個人の思想を明らかにすることはその精神を明らかにすること、その精神を明らかにすることはその時代の精神を明らかにすること、そしてそれは人間精神を明らかにすることにつながっていく、というのが楠本博士の根本的な考え方であつたことが分かる。

「精神」という言葉は、一般的に物質や肉体に対する「心」や「魂」の意味で用いられたり、高い心的能力を指したりする場合が多いが、基本的、根本的な物の考え方を示すものでもある。楠本博士が「朱子学の精神」といった表現をする場合は、その学問・思想の本質、窮極の意味を指しており、先に見たように、その思想を成り立たしめている根源的思惟そのものを示していたと言える。

楠本博士は、「朱子学の精神」を著してから約十年後、「朱晦庵の二遺業」とほぼ同時期に、「全体大用の思想」

という論文を発表して（「日本中国学会報」第四巻、一九五三）、朱子の全体大用思想の歴史的展開について詳述している。「全体大用の思想」が朱子思想の中心をなすものであり、思想的にも極めて重要な意味を持つものであることを実証したところに、楠本博士の朱子学研究史上の功績があると言えるが、この論文の終わりの方で、博士は「此思想は相対の時所に住しながら絶対を求め、それを此世に具現せしめねばやまぬ人間精神必然の要求から生じたもので、此思想の意義は全くここに在る」と述べている。

朱子を始めとする巨大な思想家に迫り、その思想の解明を行った楠本博士が目指していたものがどこにあったかということが、ようやく明らかになったと言える。

おわりに

楠本博士の朱子学研究を分析することによって見えてきたことは、その思想を生み出しているものは何か、というところに心が向けられ、ひたすらそれを明らかにしていこうとしていたということである。個々の学説や思想体系の奥にある究極のものを解明しようとしたのである。「精神」という言葉は、そこで用いられ、それは個別のもの奥にある普遍的なものを示していたのである。朱子思想研究の中で、特に「全体大用の思想」に力を傾注したのも、朱子思想の窮極（精神）が最もはつきりした形で、そこに完全かつ広大に發揮されていると見たからであろう。

朱子が、所当然が実は所以然を含むものであり、所以然の理を探究することが可能であると確信したように、楠本博士は思想家の思想を成り立たしめているもの、その思想の根源に到達しようとしたと言えよう。

楠本博士のこうした学問研究の根本姿勢は、恐らくその家学を通して身につけていたものであったとも言えるが、敢えて言えば「格物窮理の実践によつて豁然貫通すれば、衆物の表裏精粗、我が心の全体大用が明らかになる」(『大学章句』)と確信して已まなかつた朱子その人から学び得たということができよう。人の生においてその「精神」が重要な価値と根源性を有するように、人の思想においてその「精神」のもつ意味に迫ろうとしたものと言える。そして、その問いかけは、思想とはそもそも何であるのか、人はなぜ思想を生み出そうとするのか、それはそもそも何のためであるのかという、永遠にして普遍的な課題に突き当たることになる。「何故に」という問いかけによつて示されるもの、朱子の言葉を借りるならば、それこそが「所以然」の意味するものであったと言えるだろう。

【注】

- (1) 拙稿「楠本正継博士覚書」(『名古屋大学中国哲学論集』第六号、二〇〇七)、同「楠本家三代の家学と退溪学」(『九州大学中国哲学論集』第三・三三合併号、二〇〇六)、また注(5)所載稿を参照。
- (2) 楠本正継博士の生涯については、次の文献に附載されている略年譜、また(附録一)を参照。財団法人東方学会「先学を語る―楠本正継博士―」(『東方学』第六二輯、一九八一)、國土館大學附属図書館「楠本正継先生中国哲学研究」(國土館大學附属図書館、一九七五)、同「楠本文庫漢籍目録」(國土館大學附属図書館、一九七三)、九州大学文学部「楠本正継教授略歴・楠本正継教授著作目録」(『哲学年報』第三三輯、一九六二)。
- (3) 総合研究の成果を、『九州儒学思想の研究』として刊行する。
- (4) 助成費により、崎門関係写本等を蒐集し、九州大学文学部に「坐春風文庫」として収蔵する。疋田啓佑「坐春風文庫目録及び注」(『都城工業高等専門学校研究報告』第四号、一九六九)を参照。

(5) 拙稿「文学部所蔵『武内文庫』の謎を追って―楠本正継図書館長とその時代―」（『図書館情報』四〇巻三号、九州大学附属図書館、二〇〇五）、同「碩水文庫余瀆―楠本正継教授と九州大学附属図書館―」（『九州大学中国哲学論集』第三三号、二〇〇七）を参照。

(6) 楠本端山・碩水については、岡田武彦『楠本端山―生涯と思想』（積文館書店、一九五九）、藤村禪『楠本碩水伝』（芸文堂、一九七八）、岡田武彦等編『楠本端山碩水全集』（葦書房、一九八〇）等を参照。

(7) 楠本海山については、拙稿『鳶魚齋詩文』―明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿―（『九州中国学会報』第三三巻、一九九五）、同「楠本海山覚書―ある崎門学者の生涯と著述―」（『香椎潟』第四九号、福岡女子大学国文学会、二〇〇三）を参照。
(8) 楠本家三代の旧蔵書は、現在、主として以下の機関に収蔵されている。

楠本端山「楠本文庫」（長崎県立長崎図書館）

楠本碩水「碩水文庫」（九州大学附属図書館中央図書館）

楠本海山「楠本文庫」（長崎県立長崎図書館）

楠本正継「楠本文庫」（國土館大學附属図書館）

これらの蔵書については、『長崎県立長崎図書館古典籍目録』（長崎県立長崎図書館、二〇〇八）、『碩水文庫目録』（九州大学附属図書館、一九三四）、『楠本文庫漢籍目録』（國土館大學附属図書館、一九七三）を参照。

(9) 各編の構成と取り上げている主な思想家は次の通りである。

第一編 宋学の部

第一章 新儒学の発生

第二章 宋学前期（范仲淹、胡安定、孫泰山、石徂徠）

第三章 宋学中期（邵康節、周濂溪、張橫渠、程明道、程伊川、楊龜山）

第四章 宋学後期（胡安国、胡致堂、胡五峰、張南軒、朱晦庵、陳北溪）

第二編 明学の部

第一章 宋代陸学（張横浦、陸象山、楊慈湖）

第二章 元代儒学（呉草廬）

第三章 明学前期（呉康斎、陳白沙、婁一斎）

第四章 明学中期（王陽明、鄒東廓、歐陽南野、羅念庵、王竜溪、王心斎）

第五章 明学後期（李卓吾）

- (10) 拙稿『資料紹介』楠本正繼著「朱子の政事と其思想」（『九州大学中国哲学論集』第三一・三二合併号、二〇〇六）を参照。
- (11) 朱子の考えた所当然と所以然という理の二面性について、本書の第四章第六節「朱門の中では、次のように述べられている。『所当然とは主に道德の規範を意味し、所以然とはその本源としての宇宙・世界の根本実在を云ふもののやうに考へられる。』さらに、その根本実在を「無極にして太極」（「太極図説」）ということについて次のように述べている。「然し必ず無極と云ひ、同時に太極と云ふことの必要なわけは、これによつて従来老荘系思想で考へられた「無」と云ふ語の表す絶対性が、同じく儒教系思想で考へられた「有」と云ふ語の表す共同生活性（例へば家・社会・国など）と綜合されることの必要が気付かれたために外ならない。」
- (12) 所以然の理の持つ自然性について、本書の「第四章第六節「朱門」」の中では、次のように述べられている。「さて右の意味の「無」を強調すれば人間に対する自然、目的的であるといふことに對する無目的の性質を持つ自然に傾いて来る。但しこの自然も実は大きな方向があり、目的がある生命であり、靈とも云はるべきものではあるが、元來中国の思想は最も人間的と考へられる孔子の思想と雖もかかる意味の自然を背景に持つてゐる。中国に於ける道德思想は結局は自然に帰依すると云ひ得るであらう。」
- (13) 朱子を含む中国思想における教育思想に関する論文としては、「支那民族の教育思想——人間觀を中心として——」（『比較教育文化研究所紀要』第二号、九州大学教育学部、一九五七）がある。
- (14) 『儀礼経伝通解』は、『儀礼』を「経」として、『礼記』や『周礼』等をその注釈である「伝」と捉えた上で、礼学をまとめようとした書物であり、朱子は門人との共同編纂を企画するが、未完となり、朱子没後に門人黄幹らによつて完成される。

〔附録一〕楠本正繼博士 略年譜

- 明治二十九年一月二日 (一八九六) ○ 長崎県東彼杵郡崎針尾村(現佐世保市)に出生(二九日)
- 大正 四年三月 (一九一五) 一八 長崎県立平戸中学猶興館卒業
- 八年七月 (一九一九) 二二 第五高等学校卒業
- 一年三月 (一九二二) 二五 東京帝国大学文学部支那哲学科卒業
- 二年四月 (一九二三) 二六 浦和高等学校教授
- 一五年一〇月 (一九二六) 二九 九州帝国大学法文学部助教
- 昭和 二年五月 (一九二七) 三〇 九州帝国大学法文学部支那哲学史講座教授
- 三年三月 (一九二八) 三一 哲学及び支那哲学史研究のため独・英・中に留学(満二年間)
- 九年四月 (一九三四) 三七 文科研究室主任(二年間)
- 一七年六月 (一九四二) 四五 文学博士(東京大学)の学位授与
- 一九年四月 (一九四四) 四七 学術研究会議会員
- 一九年五月 (一九四四) 四七 九州帝国大学附属図書館長(二年間)
- 二四年四月 (一九四九) 四八 九州大学文学部教授、九州大学評議員(二年間)
- 二四年一〇月 (一九四九) 四八 日本中国学会理事(七期一四年間)
- 二八年四月 (一九五三) 五六 九州大学大学院文学研究科指導教官
- 二八年五月 (一九五三) 五六 九州中国学会会長(七年間)
- 三〇年四月 (一九五五) 五八 文部省科学研究費による総合研究「九州儒学思想の研究」開始

- 三一年一〇月 (一九五六) 五九 ロックフェラー財団研究助成費による「宋明思想の研究」開始
 三四年九月 (一九五九) 六二 福岡県文化財専門委員
 三五年三月 (一九六〇) 六三 九州大学定年退官
 三五年六月 (一九六〇) 六三 九州大学名誉教授
 三七年一月 (一九六二) 六五 『宋明時代儒学思想の研究』を廣池学園出版部より出版
 三八年一月 (一九六三) 六六 『宋明時代儒学思想の研究』により西日本文化賞を受賞
 三八年十二月 (一九六三) 六六 福岡市の自宅において逝去(二三日)
 三九年一月 (一九六四) 『宋明時代儒学思想の研究』により朝日賞を受賞

〔附録二〕楠本正継博士 著書・論文等一覧

- (1) 「老子の学説について」(『哲学雑誌』第三八卷、一九二三)
 (2) 「日本陽明学派の一特色」(『日本儒学の一断面』原稿、未刻、一九三七)
 (3) 「日本儒学の一断面」(『福岡日日新聞』、昭和十二年二月五日〜一〇日、一九三七)
 (4) 「宋明儒学に関する一考察―心即理の思想の発展―」
 (『九州帝国大学法文学部十周年記念哲学史学文学論集』、一九三七)
 (5) 「読易」(『哲学年報』第一輯、九州帝国大学哲学研究会、一九四〇)
 (6) 「浅見綱斎の改定中国弁」(『斯道文庫報』第六号、一九四二)
 (7) 「陸王学派思想の発展」(『東京大学・学位論文』、一九四二)

- (8) 「朱子の政事と其思想」(「九州帝国大学新聞」第二五三号、昭和一七年六月二〇日、一九四二)
- (9) 「孫子について」(「斯道文庫報」第一七・一八号、一九四三)
- (10) 「朱子学の精神」(「日本諸学研究報告」第一八編、文部省教学局、一九四三)
- (11) 「朱子学の精神」(改訂、「哲学年報」第四輯、九州帝国大学哲学研究会、一九四四)
- (12) 「宋明思想の葛藤」(九州大学文学部同人雑誌「人文」第一卷第三号、一九四七、改訂一九五七)
- (13) 「儒教の人間観」(「教育科学」、第一卷第四号、一九四八)
- (14) 「莊子、天籟考」(「哲学年報」第八輯、九州大学哲学研究会、一九五〇)
- (15) 「王陽明晩年の思想―致良知論釈―」(「叙説」第五輯、小山書店、一九五〇)
- (16) 「陽明学の精神」(「哲学雑誌」第六六卷七一―一七号、有斐閣、一九五一)
- (17) 「宋学を導いたもの」(「東方学」第二輯、東方学会、一九五一)
- (18) 「朱晦庵の二遺業」(「哲学年報」第一四輯、九州大学哲学研究会、一九五三)
- (19) 「全体大用の思想」(「日本中国学会報」第四卷、一九五三)
- (20) 「斉物論」といふ篇名に因みて」(「九州中国学会報」第一卷、一九五五)
- (21) 「二程子論―明道の部―」(「哲学年報」第一七輯、九州大学哲学研究会、一九五五)
- (22) 「続二程子論―伊川の部―」(「哲学年報」第一九輯、九州大学哲学研究会、一九五六)
- (23) 「熊本実学思想の研究―大塚退野並びに其の学派の思想―」
(『九州儒学思想の研究』、文部省科研報告書、一九五七)

- (24) 「支那民族の教育思想―人間観を中心として―」
 (「比較教育文化研究所紀要」第二号、九州大学教育学部、一九五七)
- (25) 「実学思想についての試論―所謂実事求是の方法の可能な条件とその限界とに関連して―」
 (「九州中国学会報」第四卷、一九五八)
- (26) 「中国の叡智―周易の思想―」(九州大学文学部宋明思想研究室、一九五九)
- (27) 「全体大用の思想」(補訂版、ロッキンフェラー財団研究助成報告、一九六〇)
- (28) 「宋明時代儒学思想の研究」(ロッキンフェラー財団研究助成報告、一九六〇)
- (29) 「焚書と説書」(『中国の名著…倉石博士還暦記念』、勁草書房、一九六一)
- (30) 「宋明思想家の考へた教育の本質」
 (「比較教育文化研究所紀要」第八号、九州大学教育学部、一九六一)
- (31) 「宋明時代儒学思想の研究」(廣池学園出版部、一九六二)
- (32) 「二つの道」(『東洋の理想と叡智』、東洋思想研究会、一九六三)
- (33) 「宋明時代儒学思想の研究」(増訂版、廣池学園出版部、一九六四)
- (34) 「大塚退野ならびにその学派の思想―熊本実学思想の研究―」
 (『世界史における日本の文化―三枝博音記念論集―』、第一法規出版、一九六五)
- (35) 「楠本正継先生中国哲学研究」(國土館大學附属図書館、一九七五)
- (36) 「莊子天籟考」(華琳舎、一九七八)

〔附記〕 本稿は二〇〇八年一〇月二六日、上海復旦大学で開催された「宋代新儒学的精神世界―以朱子学為中心」国際学術研討会で口頭発表した内容に基づいて執筆したものである（中文原稿「楠本正継博士的朱子学研究」は『宋代新儒学的精神世界―以朱子学為中心』（華東師範大学出版社、二〇〇九年六月）に掲載）。九州大学中国哲学史講座初代教授の楠本正継博士の学徳を偲び、九州大学法文学部創立八十五周年、文学部設立六十周年を記念して刊行される『創立八十五周年記念論文集』のために、本稿を寄稿するものである。